

二大ドックショーにて

(アメリカ編) 中久末 はるみ

「どうする？クラフトだけにする、それとも両方にしようか。」

「ラブラドルは英国だと思うけど、アメリカの方も見たいしね。といって、十二日間は長過ぎないかしら。」

なんて言う会話を一ヶ月余り繰り返して、私達の気持ちがまとまったのは十二月も末になってのことでした。

かくして、大泉・中条オバハンコンビの二大ドックショー出発に向けての準備が始まったのです。

ニューヨークはとても寒くて、宮沢外相も雪のために帰ってこれない。イヤイヤ例年に無い暖冬でコートなしで歩ける。なんて、いろいろな情報が入り乱れ、持って行く衣類の心配やら、置いて行く愛犬の留守中のことやら、主婦が十二日間も旅に出ると言うのは何と大変なことでしょう。

ドタバタと日を過ごしているうちに、とうとう出発の日が来ました。

日本を発って約十二時間シカゴはオヘア空港へと着きました

。着いたとたん何とウエストミンスターへ出ると言うイエローのラブラドルを発見、名前は「ベアちゃん」これから飛行機に乗ってショーのかいさいされるニューヨークへ行くのだそうです。外人・いやいや外犬かな・のラプちゃんに会った嬉しさに、まずい英語を駆使して「ゲット ボーイ」だの「ユアラブリー」などとゲージ越に話しかけ、なんとか仲良く成りたいたと思ったのですが、ベアちゃんの方はまるで気のない風情がありありと見えるのです。数分間の逢瀬ではありましたが、ラブラドルに会った嬉しさに時差ボケなど何処へやら吹き飛んだ所で、私達も一路ニューヨークへ……。

ニューヨークに着いてショーが始まるまで二日間もフリータイムがあつてきて何をしようか？やはりそこは女同士さっそくウインドショッピングへ出かけたのですが、そこで見たのはアメリカ二頭目のラブラドル。何とイエローの彼？彼女？は盲目の黒人に連れられ路上に伏せをし、恥ずかしそうに目を手で隠して物乞いをさせられていたのです。「カワイイ」と言うより

も可哀相、だって頭はピカ一のラブラドルのことです自分が何をしているかよく理解しているでしょうに。次に見たのも同じようなことをさせられている黒のラブラドル。ニューヨーク滞在の間町でラブラドルを見たのはこの二回だけでした。

フリータイム二日間は少数の単独展の中からセッターを選び（レトリバーの単独はなかったのです）隣の州のニュージャーシーへ行く事にしました。大泉さんと私ともう一名の計女性ばかりの三人です。ところが単独展の場所へはタクシーで行くしか方法がありません。かの悪名高きイエローキャブで女性ばかりでは危険と言われ、ツアーコンタクターの男性に同行して頂くことにしました。こうしてN・Jへとタクシーに乗り込んだまでは良かったのですが、N・Yのタクシーは州を越えるだけで料金が倍になる上に、N・Y以外のこととは全然ご存じない。N・Yで生まれ育ち死ぬ迄N・Yから出ない人が多いそうです。私達の乗ったタクシーもその例に漏れずN・Jのことは全然知らなかったのです。そうとは知らず乗り込んで、道筋を聞きながら十五分程の道のりを四十分もかかって会場へ。ところがその会場ときたらとっても辺鄙な所にあり、帰りの足などとして

も確保できそうもありません。そこでしかたなしに、乗ってきたタクシーに迎えに来て貰うことにし会場の中へ。この単独展はナショナルではなく地方のクラブ主催だったので出陳頭数も余り多くなく、面白みに欠けておりました。三時間程見学し、迎えに来たタクシーでN・Yへ戻ることになりましたが、これからが大変。どうも道が違うのです。来た時は町中を通ってきたのに、帰りは見渡せど山また山。道が分からないのかと言っても、運転手は「ドント マインド」の一点張り私達の心配をよそにツアーコンタクターは平然として、たまに「道が来たときと違うねエ」と言う程度。運転手は百舌鳥をゆうに越えると思われる黒人の大男。ツアーコンタクターときたらヒヨロリとしたヤサ男。手に汗にぎり普通の時ならうっとりとするような雄大な山々も見とれる余裕もなく、ドキドキしながら二時間程N・Yが見えた時にはドツと疲れが出てしまいました。その上料金が行きの三倍以上。行きの料金との余りの違いにすったもんだ。すると大きな身体の黒人さんが目に涙なんか浮かべちゃって「家には腹をすかせた五人の子供が待っている。このN・Yで生きている俺の身にもなってくれ。」なんて言うのです。

アー可哀相なんて思って少しまげさせて手を打つことにしました。こんなことはN・Yでは良くある事でゲームの様なものだと思います。皆々様、N・Yへ行かれた折にはイエローキャブには充分ご注意めされよ。

道路はゴミだらけ、建物は廃棄ガスのため真っ黒。恥ずかしそうにしていた二頭のラブラドル。そしてイエローキャブ。ウエストミンスターの序章としては余り芳しくなく、ニューヨークでのフリータイムは終わりました。

ウエストミンスター第一日目は、ワーキンググループ・テリア・ノンスポーツィング・ハーディングで始まりました。ハーディングは牧羊犬・シェパード・コリー・オールドイングリッシュ・コーギーなどが入ります。ショー会場はご存じマジソンスクエアガーデンで行われます。席はすべて指定席になっておりすべてのリングが見渡せます。もちろんリングサイドでもブリード戦は見る事ができますが、リングサイドには席が少なく、お目当ての犬種の側で見たかったら早めにリングサイドを確保しなければなりません。

私達のお目当てのレトリバーは二日目のスポーツィングなの

で、一日目は会場内の売店に顔を出しているほうが良かった様です。レトリバーの絵や、レトリバーの指輪、ネックレス、ショー用リード、本、ビデオ、コップにお皿。書き切れない程レトリバー製品があるわあるわ、あれも欲しいこれも欲しいなどと言っているとても予定していたお金では間に合いません。

そこで「この指輪は十四金だし、顔もあまり好きじゃないわ」「こちらのカップも今一よね」「きつとクラフトの方がレトリバーは良い物があるわよ」と苦しい理由を付け、手に取っ手は置き、眺めては諦めて、何枚かの絵と何冊かの本を手に指定席へ。ブリード戦が終わり一時間ほどの休憩をはさんでpm七時からグループG戦が始まります。

ワーキングG十九犬種。コモンドールやボーチュギューウォータードック他珍しい犬種も数多く出ています。テリアG二十五大種、ノンスポ、ハーディングとどの犬種も数多く、珍しい犬が多いのに目を見張ります。

みんな自分のお目当ての犬が出て来ると、口笛を吹いたり盛大に拍手するので会場が一体となりG戦だと言うのにBIS決定のようです。こうしてこの日のG戦でG1に決まった犬が次

の日のBIS戦に望みます。

翌日は私達の愛するレトリバーのスポーディングがある日です。朝食もそこそこに、私達はマジソンスクエアガーデンへと向かいました。レトリバーは公認されているのが五大種ですが、リングが違っていると始まる時刻が同時というのがありまして。RLとGLは向かい合わせのリングでほとんど同時刻に始まり、そこで、両方のリングサイドに席を取り両リングを行ったり来たり忙しいのなんのって……。まずRLの方ですが全体にコンバクトにまとまり形はスクエア、筋肉の線が浮き上がり、歩様ははずむ様です。リング上でも皆リラックスして自分の審査でないときは、ハンドラーに飛び付いたり寝そべったりしているのです。(前日のG戦の時も、仰向けに寝転んでいるワンちゃんも居ましたよ。)

我が家の子供ときたらみんなショイ嫌いで、会場ではブスツとして「早く帰りましょうよ」という有様なのに何という違いでしょう。

RLは首筋から尻尾にかけ余分な毛はカットされとてもスッキリしています。アメリカのRLが筋肉質に見えるのは、この

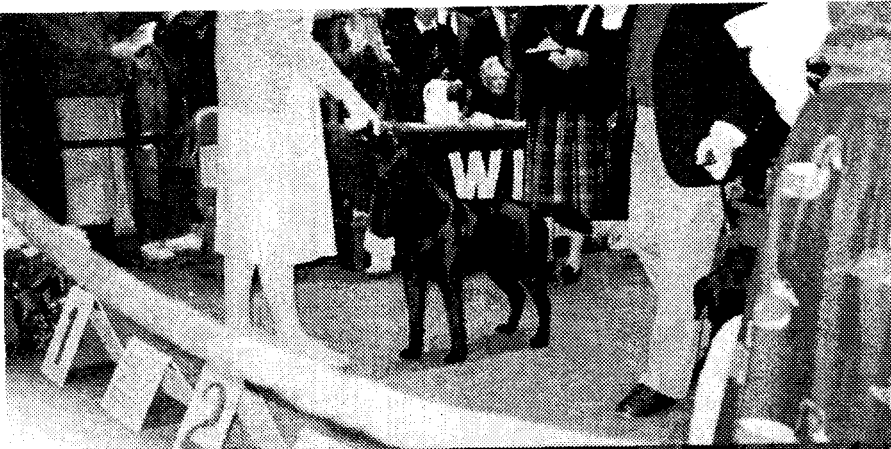
トリミングに依る処もあると思います。毛色はやはりイエロー続いてブラックが多く何頭かのチヨコレートが出てきました。

どの犬も多少の好みはあるけれど、やはり選び抜かれただけありBOB戦に出てきた各クラス一席犬達は甲乙付けがたい犬でした。BOBにはCh・Sailins Captain Keily O'kidd CDという三才半になるイエローのオスが選出されました。余談ですが、去年のBOBになったシーブリーズというやはりイエローのオスは、とてもショーマンシップに富み大変な人気者だったそうです。ちなみに今年の出陳頭数は五十三頭、出陳頭数だけで見ると大した事はないように思われるかも知れませんが、皆アメリカ全土から選び抜かれた素晴らしい犬ばかりです。GRの方ですが、こちらは何と出陳七十八頭、きれいな毛色の犬がズラリ、歩くとフェザリーングが左右にこれみよがしにたなびくのです。四く五年前はマホガニーがとても流行っていたそうですが、今年は一頭もいませんでした。今年はどうもライトゴールドが主流のようです。BOBはCh・Twin-Beauty Bonkens四才を迎えたばかりのオスに決定いたしました。

↓審査風景

さて、どこのこが・・・

←若犬にして勝ち抜いた子



さてこの日は、スポーディング、ハウンド、トイのG戦の後
p m九時からB I S戦が行われます。前評判ではビションフリ
ーゼのばく&スタッフか、ジャーマンシェパードのコービー・
ターカーヒル・マンハッタンがB I Sになるでしょうとの事、
マンハッタンは今年でもう七才今日B I Sが決定すれば引退す
る予定だそうです。審査員の方は女性はドレス、男性はタキシ
ードです。予想通りビションとシェパードの応援の凄いこと、
イヨイヨ、B I S決定「コービー・タッカーヒル・マンハッタ
ン」そうです七才のシェパードの頭上にB I Sが・・・。決ま
ったとたん彼はハンドラーに飛び付き身体中で喜びを現すので
す。場内は総立ち。大きなトロフィーの横でリードをはずされ
一人でお座りをしているマンハッタンの周りには、徐々に人の
輪ができ、私の席からはもう彼の姿は見えなくなってしまいま
した。B I Sが終わった時は、既にp m十一時を回ってしまし
た。

翌日、まだ興奮さめやらぬまま、ケネディ空港を後に、いざ
ロンドンへヒースロー空港へ・・・。

ヒースロー空港から衛兵交替を見るため、バッキンガム宮殿

へと向かいました。衛兵交替の時、先頭を歩くのが何とラブラドルなんですって。ツアーコンダクターの方は何回となく見ているのに犬種を知らず、N・Yにいるうちから「黄色と言うより白っぽくて耳が垂れ、ブルドックの様な顔で、雑種かなあ・・」なんて言ってたんですが、ウエストミンスターでラブラドルを見て「そうです、この犬です！」ワクワクしながら待ってたのですが、何と来ないんですラブちゃん。隊が違っていたのです。幾つかの隊があり、それぞれの隊がマスコットを持っています。ちょうどその日はラブちゃん隊ではなかったのです。今度来る時はラブちゃん隊でありますように・・」

クラフトの会場はテニスで有名なアールスコートです。ホテルからアールスコート迄は地下鉄で一駅ですが、歩いても十五分足らず。私達はロンドンの古い街並みを楽しみながらほとんど歩くことにしました。

クラフトショーは正直な所ウエストミンスターと比較するとあまり盛りあがりがないようです。G戦も「エッ、決まっちゃったの」なんて具合ですし、出場犬も右を向いたり左を向いたり、G戦の間ずーっと泣き通しのワンちゃんさえいるんです。

ほとんどのワンちゃんが、お風呂はゴメンナサイをしてきたみたいで、ワンちゃんをなでた後、手にはプーンとかぐわしい残り香が・・（もちろん中にはキレイにしている犬もいます。）

ハンドラーは、ほとんどオーナーハンドラーが多くとなりのオジサン・オバサンが普段着でちよつとワンちゃんの散歩のついでに來ましたなんて言う感じ。なんとショーの終わった後、地下鉄に乗ってラブラカえるワンちゃんも居ります。何ともウラヤマシイではありませんか。

「グランドツクG戦の日、私達は「The・L・R・Club」に入るため申し込みに行ったのですが、紹介者がいないとダメなのです。「エ？はるばる遠い日本からきたのにー」と言っはみても、規則は規則、「ダメです！」の一点ばり。しかし何という幸運、神のお導き！ミス・プラットレーが紹介者になつてくれたのです。ミス・プラットレーが紹介者なら文句はないはず、私達はめでたくクラブの会員になれたのです。その後ミス・プラットレーと一緒にカメラにおさまったり、彼女の犬にさわらせて頂いたり・・。

「とってもやさしいブラッドレーさんなんて日本にサンデー

ランズを出してくれないの。」日本にも心からLRを愛し、家族の一員のように思っている我が東京南LR Cというグループもあるんです。

英国のLRは見た目はふっくらブヨブヨという感じに見える子が多いのですが、さわってみると固いんです。きんにくがパンパンに張っているのです。アメリカのLRが若者なら、英国のLRは人の良いおっさんという感じ、どちらも甲乙つけがたくもう後は、それぞれの好みでしょう。

クラブト四日目、今夜はベストインショー戦が行なわれる日です。私達はその時間迄、まえもって連絡をとっておいた犬舎めぐりをしました。犬舎めぐりをしてみて英国が日本に犬を出さない理由をはっきりと目にしました。何エーカーという広い芝生がラブちゃん達の遊び場なんです。とうてい日本では望めない環境の良さです。私の愛犬にも英国から来た子がいるのですが、この環境の中でずーっと育つことができたかもしれないのに、何となく可哀相なことをしたような気持ちにさせられ、かくなる上は溢れる愛情で包んでやらねばと気持ちを新たに致しました。

犬舎めぐりを終え夜はB I S戦を見るため、アールスコートへ、クラブトB I Sはアフカンハウンドでした。

二つのドックショーを見て私の感じた事は、ウエストミンスターはビジネスショー、そしてクラブトはホビーショーというイメージでした。長いと思った十二日間もアツという間に終わってしまい、帰りの機中は、すでに次の旅行予定を。他のツアー参加者から「元気ねえ」と感心された私達オバハンコンビでありました。

(つづく)